他の巡拜者や同志の者も僅に其の一小部分を記述し得たに過ぎない。實際、今此の地にある古代の神聖な地形を調べようとする者でも極度に達した此の豐富な光景を見てはどうすることも出來まいと思はれる。その一例を擧げてみれば、カピシャのことを述べた處で「大城の東三里の地に當り山の南麓に大伽藍あり」と云ふ一句を見たが、暫く記事を離れて見渡すと、果して東方に孤立する丘の最南端突角の上に、唯一個の佛教建築を見るのみで、何の疇躇もなく其の僧院の所屬と、逆に又舊都の位置とを決定することが出來た。ナガラハーラに就ても法師は全然同樣の指示を與へて「城の東三里の地に高さ三百尺の窣覩波あり云々」と言つて居るが、見渡す所六個所程の塚があつて、而もそれが捨て難いものばかりである。そこで其の選び方次第で、舊都の位置は、西方スールク・アーブ Sourkh-âb（赤い水）の落合から東方ヂェララバードまで七八吉米突に亙る谿谷の間を、どちらにでも移動することになる。かうなると地形の外觀のみで判斷することは出來ない、最後の決定を與へるものは何と言つても發掘であると言はねばならぬ。